1989年4月7日、朝日新聞に社説として掲載された記事「中学生になった君たちに」を読んで、感想を書いてください。

社説の内容は中学１年生に対してのメッセジーですが、自分が中学校入学時に決意したことを思い出しながら、２年生となった今、先輩として、また同級生の中で自分はどのようなことに心がけ、生活していくかを中心に考えて、「２年生になってどのように行動するか」という決意文を書いて下さい。感想はノート１ページ程度に書きます。

「中学生になった君たちに」

新学期だ。小学校から大学まで、大勢の一年生が誕生した。そのなかで、今日は、中学一年生になった君と、話したい。

少しおとなのなかま入りをしたみたい一君はいま、こんな気持ちじゃないだろうか。この間までの小学生と違って、たしかに中学生はおとなへの第一歩だ。男子なら半ズボンをはかなくなる。女子なら、そう、自分専用のジャンプーがほしくなるとか。だいいち、遊ぶ場所の入場料なんかも、こども料金でなくなる。

小学校では、受け持ちの先生が、国語も算数も社会も教えてくれた。中学は、科目ごとにべつの先生が教える。内容もむずかしい。英語の授業もはじまる。範囲が広がるのは、教室の勉強だけではない。たとえばサークルの活動でも、小学校のように先生が一から十まで指導するとはかぎらない。生徒どうしで相談して、練習を進めることだって、ふつうだ。それだけ生徒は信頼されているのだし、その分、責任もあるわけだ。友だちがなにかいけないことをしたとする。「先生に言いつけるよ。」と小学校の、とくに低学年のときには、みんなが言った。もう、いつもいつも、そんなわけにはいかないだろう。先生に解決してもらった方がいい問題もあるが、中学校の生活では、自分たちの責任で判断しなければならないことがらも、しだいに多くなってくる。それが、おとなになっていく、ということでもある。責任を持つ。自分で判断する。それは、実際はなかなか大変だと思う。「自分の頭で」きちんと考えなければならないからだ。「あいつはクライ」という。「あの子はむかつく」という。中学校では、そんな言い方がしょっちゅうだし、小学校にも伝染している。けれども、ちょっと待ってくれ。「クライ」だの「むかつく」だのと、君が「自分一人で」感じたことなのかどうか。「みんなが言うから」それに合わせて言っているのではないのか。だんだん、みんなが言うのをやめ、君が最後の一人になっても、「自分の責任と判断で」、相手にむかって堂々とそう言えるか。そこのところを考えてほしいと思う。 いじめの問題もそうだ。大勢の「いじめっ子」が、弱い一人を寄ってたかっていじめている。または、助けもせず、黙ってみている。これが、いま学校で起こっているいじめだ。みんながいじめるからいじめる。そこに、自分の考えはない。「大勢」の一人が君だとしてら、見ているのが君ならば、君は自分を正しいと考えるだろうか。むかしは、こういう行動を「ひきょう」と言った。自分だけが目立つと、上級生に「なまいき」だといじわるされる。そこで一年のときはできるだけ地味にする。そのかわり、二年になったら一年にいじわるする。かなり多くの中学校で、そんな話を聞く。 だれかがやめなくては、このバカげたくり返しはとまらない。自分の頭で考えられる人間ならば、やめる努力はできる。以上の話を新一年生の君にしてきた。しかし、君がかりに二年生であっても、三年生であっても、同じことを言いたいと思う。二年生ならもっと、三年生ならさらに、この話を理解でき、実行できるはずだから。